

翻刻「姫路藩御船歌」(一)

飯 島 一 彦

一 姫路藩御船歌について

『姫路藩御船手組』(改訂増補版、ハードカバー三八九頁・昭和五九年刊、私家版)という書物がある。

これは兵庫県姫路市飾磨(しきま)(かつて飾万津と称した姫路藩の要港、御船役所・御船茶屋などがあった)在住の郷土史家、下里静氏(しずしずか)(大正六年生、平成十三年四月死去)が後半生を懸けて姫路藩御船手組に関わる文書・史料を博搜し、まとめた労作である。

かつて警察署長まで務めた氏は、下里一族が代々御船手組として姫路藩に仕えていた家筋であったことから、「船手の子孫の一人として、私が一念発起し、船手組の解明を志した」(同書初版はしがきより)方であった。その熱心な資料蒐集と綿密な整理には頭が下がる。一藩の御船手組関連の資料がこれだけ揃ってまとめられている例を、管見ながら他には知らない。

詳細は同書を参照していただきたいが、それに拠れば、姫路藩御船手組は慶長五年（一六〇〇）、池田輝政が初代藩主となってまもなく創始されたと思われる。当初の事情の詳細は定かではない。輝政の時代には船頭五十五人水主七百人を数えたときれる（『池田分限帳』）。その後分藩・転封などがあり、藩主は本田氏・松平氏・神原氏と頻繁に替わって、寛延二年（一七四九）に酒井氏になって以降幕末に至る。その間御船手組は、本田氏以降は「城付き」となって、藩主交代にかかわらず地元在住の御船手として、御船奉行の下で飾磨・高砂・家島・室の四津の船役所・番所に配属され、二百人ほどの体制で瀬戸内海の要所の一つである播磨灘及び領内の河川海上交通一切を管理していた。その職務内容は、公儀御用銀運搬・警護、朝鮮通信使警護・接待、公儀役人警護・接待、通行大名接待、密貿易取締、切支丹取締、船荷盗犯取締、海難救助、水死人検屍、浦役管理、御船手船艘維持管理、漂流船舶管理、往来切手発行、漁場保護・取締・訴訟管理等々に及び、加えて日頃の武芸鍛錬が義務づけられており、大変多忙と思われる役務であったという。

その内特に二十人前後が、音頭指南・音頭上ケ・音頭組として組織され、藩主の乗船に際して御船歌を歌っていたようである。

御船手の先祖は三木城に拠って、秀吉に攻め落とされた別所氏の臣下という言い伝えがあり、いわゆる海賊とは違う陸の武士の系統であるようである。彼らは幕末まで微禄であったが武士としての格は高く、藩主に直にお目見えできるものとしての矜持を保ち続けたようである。

さて、下里静氏によってまとめられた、姫路藩御船手組の右のような事情を明らかにする多数の資料の中に、御船歌本がいくつか紹介されており、また姫路藩における御船歌成立に関わる注目すべき資料も数点掲げられて

いる。

挙げられた御船歌本は『姫路藩御船手御歌本□全』（下里文書）・『御船歌集』（川中文書、全八冊）である（二本とも紹介のみ、極く一部を除き本文は未翻刻）。これらは新出の御船歌本であり、存在を知られていなかったものである。ただし、このうち川中本全冊については当時の所蔵者が死去後、その所在が不明なのが残念である。しかし、一部は下里静氏によってノートに丁寧な書写され、残されていた（後述）。

また、姫路藩御船手組は幕末まで数回に涉って幕府御船手組に御船歌を習いに行っていることが史料によって判明する。幕府御船手組と各藩の御船歌の直接的な関係を確認できるのは希有な例である。資料に拠れば当然幕府系御船歌とでも称することが出来そうであるが、残されたものからは地方性が色濃く伺われ、姫路藩は幕府御船手組から習ったものを「江戸吟」と称して他と区別していたようである。従って、姫路藩御船歌の「江戸吟」以外の部分は、他藩から見れば当然「播磨吟」とでも称すべき部分で、地元の播磨にはむしろその呼称は残らないが、周囲の幾つかの藩の御船歌には「播磨吟」が残っている。

本稿は右のように『姫路藩御船手組』という書物に大いに導かれて、実際に眼にすることが出来た『姫路藩御船手御歌本□全』、及び下里静氏のノートに残された川中文書中の御船歌本を翻刻し、それらを併せて「姫路藩御船歌」として示すものである。その理由については後述する。

なお、姫路藩御船歌の組織・成長過程については、その私見の一部を日本歌謡学会平成十三年度秋季大会（平成十三年十月二十八日於甲南大学）にて口頭発表を行なったが、いずれ成稿する予定であるので詳細はそちらに譲ることとする。

二 『姫路藩御船手御歌本 全』について

下里洋史氏（兵庫県姫路市飾磨区東堀在住）蔵『姫路藩御船手御歌本 全』については、氏のご厚意によって実見・調査する機会を得、写真撮影を許された。写真は現在上野学園日本音楽資料室に蔵されて研究者の閲覧に供されている。本書の書誌については左記のごとくである。

- ・縦二三・一纏、横一六・五纏
- ・四目袋綴写本、本文料紙は斐紙。
- ・表紙は表裏とも下里 暁氏（洋史氏先代）により書道用白半紙でくるまれており、本来何か記されていた形跡があるが判読不能である（後掲写真1参照）。
- ・下里 暁氏の補修した表紙に表題が記されており、題名はこれに拠った。原題が何であったかは確認できない。
- ・裏表紙にも同氏による本書伝来に関する識語（昭和六年銘）がある。ただし、その内容は同氏が作り上げたものではないかという（下里洋史氏指摘、後掲写真8参照）。
- ・表紙後、裏表紙前に各遊紙一丁があるが、それぞれ表紙に全面貼り付けられていて、本来の表紙見返しを確認することは出来ない。
- ・本文墨付一一四丁、その内ははじめの二丁は収載御船歌の目録（ただし本文内容とは異同有り、一部破損により判読不能）。

- ・全体に汚損・ムレ・ヤレがあり、判読不明箇所も少なくない。
- ・片面六行書き、多くは一行二三〜一四字、一部二十二字に及ぶものもある。
- ・全体に朱で「●」「○」「・」「上」「下」「付」「引」「入」「さん」「ふし入」「イ」「ヤ」等の傍書、および一部訂正が書き入れられている。汚れ方から見ても、書き込みのあり方から見ても、実際の歌唱に供された稽古本と認められる。
- ・同様な傍書は数は減るが墨でも記されており、さらに墨で記された「付」「さん」等の上に朱をなぞっているものが数多く認められる。これらを勘案すると、墨の傍書は書写底本（おそらく御船役所本）にもともとあったもので、朱は書写の後に書き加えられたものであろう。実際の歌唱に接して手直しを加えたものであると考えられる。
- ・傍書には「せつきやうふし」「ころくふし」「とさふし」「なけふし」「かんさきふし」等の墨書による節名注記がある。

- ・本文一〇七丁ウに「文化十一年正月写之」とあり、その当時間もない写本と認められる。それに続けて一〇八丁ウまで御船手御歌方二名の連署が写されている。これは、御船役所にあった、いわば御船歌の証本を、当時の音頭組が連署して書写した事を意味すると考えられ、さらにそれを筆写したのがこの本である。

（後掲写真6・7参照）

- ・書写は下里洋史氏（大正十三年生）四代の祖勇八（一七六八〜一八四六）の手になるものと思われる。同氏宅に残された『姫藩船要録』『覆船紀要』と同筆である。勇八は音頭組に属した形跡が無く、有能であった

せいか早くから上席を占めていたようで、御船歌に積極的に関わる機会はありませんであったようである。従って「目付格諸芸事立会動」になった天保六年（一八三五）以降の筆写ではないだろうか。

本書の内容、幕府及び他藩の御船歌との関係などについては語るべき点が多い。それは、姫路藩御船歌の全容と関わりとともに、特に御船歌形成の歴史と直接深く関わると思われるからである。しかし、事項は多岐にわたり、考究すべき点も多々残したままであり、ここでは詳述には及べない。本稿ではできるだけ体裁に忠実に翻刻をするのみにとどめる。

三 『御船歌集』（川中本）について

この表題は下里静氏の命名によるもので、『姫路藩御船手組』の中での呼称であるが、実際は御船手の子孫川中家に伝わった各冊別個の内容を持つ御船歌本計八冊を一括した名称である。前述した如くこれらは現在所在不明で、その一々の内容は下里静氏によって残されたノート（『姫路藩御船手組記録 19 御船歌集（二）』によって窺うしかない。その記述をそのまま左に転載する。（□は判読不能部分）

川中文書一覧

（昭58・8・10借用〜昭58・9・返却）

A 大冊 表紙藍色 無題

四五歌集録 目次付

（中一〇歌ノートに記載）

弘化五年（一八四八）二月写之

音頭組名簿付（ノートに記載）

B 大冊 表紙灰色 無題

四五歌集録 目次付

最終頁に「川中市兵衛」と記す

内容はAに同じ

C 中冊 表紙茶色

表紙に「音頭」「御船役所 二冊の内」と記す

七六歌集録 目次付

最初の頁に次の如く記す

「享和元年酉年（一八〇一）改

船音頭

御船役所」

後尾に船手組音頭由来を記す

（音頭□□のみノートに記入）

最終頁に 燈 孝良 筆写 とある

D 中冊 表紙藍色 無題

三〇歌集録 目次付

弘化五年（一八四八）二月写之

音頭組名簿付（Aに同じ）

E 小冊 表紙薄茶色 無題

第一頁に「新江戸御船音頭」と記す

一七歌集録 目次付

末尾に次の如く記す

「天保三壬辰（一八三二）十二月写之

川中弥太夫」

F 小冊 表紙白

「御船（偽）音頭」と題す

目次なし

「文化三寅（一八〇六）正月改之 望月佐七所持」

G 小冊 表紙白

「御船唄本」と題す

四歌集録 （内二歌ノート記載）

末尾に次の如く記す

「安政二卯年（一八五五）二月写之

稽古人 川中市兵衛

荅 栄次 「

右は江戸幕府船手組へ留学修行

した際の稽古本と推定される

（免状と一致す）

H 小冊 表紙〇色 無題 （借用せず）

目次なし

右に示されたA～H本の内、氏のノートにはA全歌、C目次のみ、D全歌、E目次・三歌抜粋のみ、G全歌、の翻字が残されている。なぜこのような記録をしたかは一見解せないが、これらに下里本（『姫路藩御船手御歌本 全』）を加えて年代順に並べて掲載曲目を比較すると、その理由がよく理解できる。後掲の「姫路藩御船歌本掲載曲目比較一覧表」にて一目瞭然であるが、要するに下里静氏は姫路藩御船歌の全容を示そうとして、全曲目についての翻字を行なったのである。言い換えれば、おそらくAEDGの四本で姫路藩御船歌のすべての曲目が網羅できると考えられたのであろう。

ただし、F本についてのみは翻刻がなされていない。目次も示されておらずH本とともにその内容は不明である。おそらくその題名から察するに、内容を公にするのは不適当と判断したのではないだろうか。

とにかく、姫路藩御船歌の全容は川中本八冊を抜きにしては考えることが出来ない。現在所在不明であるのが返す返すも残念である。しかし、下里静氏によって残されたノートによってその内容を窺うことは可能である。本稿ではページ数の問題もあり下里本のみを翻刻するが、次号に下里静氏によって残された川中本の一部（姫路藩御船歌の全容）をすべて提示することとしたい。

四 凡例

- 一 ここでは姫路藩御船歌の内、下里洋史氏所蔵本である『姫路藩御船手御歌本 全』を翻刻して示す。
- 一 原本の字詰め・行立てなどをできるだけ忠実に示すことにとめた。
- 一 一般の変体仮名はすべて現行の平仮名になおした。漢字表記は原本のままである。
- 一 本文はすべて墨書である。
- 一 本文墨書を墨で囲ってある部分については本文を で囲ってある。
- 一 傍書は墨書のもはそのまま脇に小さく示したが、朱書の場合は で囲み、墨書の上に朱を重ねたものは で囲んで示した。その他の記号についても同様である。
- 一 本文中 となっているものは、墨書に朱の縦線、 となっているものは、朱書に朱の縦線で消していることを示す。

- 一 諸記号の内、●は墨書の○の上から朱書で塗りつぶされていることを示す。
- 一 その他、墨書の上に朱書の×◎などで字を消している箇所があるが、出来るだけ忠実に再現した。
- 一 本文（ ）中に示した字は、一部虫損、汚損、欠損がある箇所で、判読は難しいが推定したもの。
- 一 汚損等で判読不能の字は□で示した。

『姫路藩御船手御歌本 全』翻刻

「表紙」

姫路藩御船手御歌本 全

下里 暁

「二丁オ」

④	かうてい	④	しら雪	④	たつた川
④	宇治川	④	いなり	④	古筆
④	たなはた	④	池田	④	月見
④	かた	④	御濱出	④	新（古筆）
④	都渡	④	太平	④	御（城廻り）

牡丹

新牡丹

(八景)

「二丁ウ」

〔五〕

たから揃

椿つくし

松そろへ

御船落シ

同三

七つかわり

遊女そ(ろえ)

嶋廻り

伏見下り

道中一

船さい文

魚そろへ

(きく)

(櫻揃)

時そと

同二

住吉詣廿一(替)

かしま

「二丁オ」

〔五〕

初春

明德

春立

花よせ

時なり

酒くとき

菊すい

徳若

「二丁ウ」

「三丁オ」

印(朱印「下里蔵書」)

后帝

やら目出たいのあまの岩戸の明

くれに月もところになにしを

かけをうつしてみつまたの浪

しつかに船さしてのりゆ

はこまかたやたれまつち

「三丁ウ」

みれは心も隅田川なかれにう

一よふの舟のむかしはもろこし

くわてきとい、しつわものはふんぶ二

道のたつしやなりある時にわに

立出て池のおもてをななむれは多

いやよく此せいとふく秋風に

「四丁オ」

柳の□ひとはちりうか_あ浪に
たゝよふそのうへにいつくともなく
さゝかにのくものうへより出きたり
●いととはかなくもうちのりて●みき
わによりし有様を●けにもお□□
そめしより船をたくみて□□

「四丁ウ」

りたり●みかとは是を奉る●扱□□
船のせんのしを君にすゝむとかく□
かや●かうていこれに召れつゝ●四海
を安くこきわたり●おんよ□おさめ玉ふ
こと●一まん八千さいとかやかゝるため
しをおもひ□今にたへせぬ船あそひ

「五丁オ」

●八百萬代はかきりなしやら／＼

しら雪

ゑいまたしら雪のふるとしに春

をしらす鶯の●のきなく梅か

えの花の匂ひはこそよりも□ゑいなが

めに□まさるあおやきの●糸くりか

三

「五丁ウ」

ゑしおしむと□すれと春も□□

●なかはの此に山桜●さきそめ□しほ

れいさきやはるの山邊にませり

なん●くれなばなき□花のかげかわと

すきしむかしをおもひにて●た

ちさり□かたきこのもとにゑいやよく此

「六丁オ」

日数／＼よのほんほゝほのほんほいやへん

ぬれば山吹のそれ花の／＼よのほん

ほゝほのんほゝいやさかりにゆく人は●

なをすきかねてななき日をけふを

くらしてふしなみのたつややよい

のあけほのに●たゝひとこゑの時鳥

「六丁ウ」

●行ゑをみれば有明の月の光□

卯の花□いろをあらそふこゝち

して●みるにもあかぬ我君のあ

おひつゝしのいろく●花たち

はなの香をかけばむかしちきり

しきみ●袖の匂ひかとおもふ

「七丁オ」

心は深見草●わすれもやらて

なつもはやそなた

龍田川

我はいなかのものなるが●みやこのき

みもつれなくて●うきなをなかつ

たつた川からくれなるのみ(し)

三

「七丁ウ」

はに袖になみたはくらへこし●ふり□□

神みの数くにおもひみたれて我

ことく●くもるに□もへてとぶほたるむ

かしのわかにもおともせておもひにも

ゆるほたるこそゑいなく虫よりもあ

われとはやよゑやなさけの深きこと

「八丁オ」

のはをしらてすきゆく君様の●

むくろの□ほとこのゆくすゑはちたび

もゝたひかきやりし。その水草の

かいてもなく□此ふりのよいさまにやれ

なさけのないわのさへゆく用に●かゝれ

むら雲いやそしやないそよつれ(も)

「八丁ウ」

なく此きみにこそたのみあれあ□□

きよりも松のゆき折しゑいやよへ□いつか

くとおもひねのゆめに

宇治川

昔のりより義経は木曾のらうせきしず
めんと●軍兵□あまた引くして●出たたち

〔九丁オ〕

もふそゆかしけれころはむつきの

ことなる□ひらの高ねやしかの山むかし

なからの雪もきへ●たにく□氷打とけて

水はおりふしまさりける●よはほ□のく

とあけゆけど●川きりふかく立こめて

馬やよろいのけいろ□それとはかりも見へ

〔四〕

〔九丁ウ〕

さるに●さゝ木の四らう高つなや□る□□□

はら□源太かけすへは●せんちんこちんのあら

そひてゑいやよく此●宇治川のさしも

にはやせくともおせとも●らんくい大つな

きりはらい●いけつきするすみめい

ばにて●むかいのきしに打あかり●

〔十丁オ〕

此せんじんのはしめとし●とうこく□

かたのおくせいかわれもくとせめければ

ちからおよはぬ小わた山●ふしみを

さしておちゆけ●おさまる御代と

なりにけるやらく

いなり

〔五〕

〔十丁ウ〕

いなりにかくる弓やわたひかは心も(く)れ

はとりあやのつゝみのねに立て●おる

に□きとの明暮もおゝあわれ□たれかゆふ

かほのつゆのおもひはみのあたか●せう

くせゝのおもひくさ●ひく手に□あかる

いしかめもおゝみもすそ□川にときそめて

〔十一丁オ〕

ゑいうらみ□くすのゆうまくれめぐり
たゝすの羅しふもんたれを松風村雨。
月のあさかほ日にそいてくねるおも
いはおみなへし●た、一とせはまつの山
●すかたを□見れはしらひけとおくなれつ□
としては老松のあわれむつよのたま

「十一丁ウ」

かつらかけてめくるはくるま□いつ□
心はすみ田川ゑいやよく此のなる
神がくものたえまにおとされてゑい
たいりのもんのにゆふたちぞするやよへ
や●おもしろ□○雲のたえまの月かけを
ふたりしつかになかつ、かゝる

「十二丁オ」

まくらはかんたん□梅はをしほの山
おろし吹は花ちる桜川なみの舟
はしうち渡り□なかきひかきもくれ

ければかねもさやけき三井寺のにわの
はせふもやふれ□あたりさひしき
の、宮の森にひくはふしたいこあ

「十二丁ウ」

まの羽衣かさね□雲に上るわひはり
山やまはおとはのみねならひ●のほれ
是もたかさこの松わや

古筆

てんかたいへいこくどあんをん国のも
のどかにおさまりてことにかいたい

「十三丁オ」

しづかにてたみもゆたかの御代なれ
ばはるのお江戸の□名所きうせきの
こりなくやかたくの見事さは筆に
かくともつきもせじ中に取わけ
いくちよ□たのみ奉る君の御もんに立
入りてげんくわひろまをながめ□みかき

〔六〕

「十三丁ウ」

たてたるもの、具は玉もか、やくこ
とくなりろうかよりしてしよゐん
が、りをながむれはなげしいちだん
とこの□さてもかけじの見事さは
ゑんごきどうのほくせきにだひへぶ

しゆん□なんそなんどのしゆせきかと

「十四丁オ」

たれにたふばかたけとかやさても

みことなうすばたに●さしたる□花
をみてあればよい久しき松と竹

●しんすい□さいてそいやうけうちやう
さたんの心もち●としふり□まさるこ
ぼくのねたけくみへけるほらのねや

「十四丁ウ」

ゑいやよく此^{（此）}水ぎはまでもこまや^{（こまや）}

かに□さてもねぎわをさゝれたり●扱
また四方のしやうじには●天じく□し
たん残りなく●こまもろこしを
かゝれたりみなみおもてに□立たび
よぶをみてあればひかる源氏にみ

「十五丁オ」

みへしは●そもくきりつぼの●夕べ^{（夕べ）}
のけふりすみやかにはれて心のすま
あかし●はなちる里のはゝきゝも●
のこるも花のゑんかとよ●そのさかき
ばのもみじか●あおいのうへにみよ
つくし●六十四畳のながれまで●

「十五丁ウ」

きんぐくこんじゆ□ゑんしゆせいたいろく
しやうのふでにてかゝれたりやらく

たなはた

しつやたん^{（たん）}●しつかおもひのそら

はれていつかあふみのか、み山おもて
むくへきよふもなし●こくうをてら

〔七〕

「二六丁才」

す月も日もしほのいほりにうつろへ
ばゑちかたく火もこのたひ□あわれなる
とよあまおふねこかれゆくみぞもの
おもひあげなんと□あんじくらせはよし
やた、ゆめのうきよのあたなるにわ
すらんれもせぬ我こひはいやたなはた

「二六丁ウ」

のちんくきひんひひ、んひひてほん
ほゝゑいつゆの□まもそんくはゝんは
はゝんはゝてほんほゝゑいあさも□よさも
ゑいそりやおもたはかりいよのほゝんほゝ
ゑい□月に一度もあいもせて●身は玉虫や
ほたる火の●きえ入はかり□こかれ行らん

「二七丁才」

むねのすゝむしや□おゝ今この□うらに
引あみも●目ことにもものやおもふらん
詠したまへし和哥もあすいや
知らせはや人^わをうらみの^国恋衣●
なみたかさねてひとりぬるよふと
よませたまふもことはりかこくもうす

「二七丁ウ」

くも我心●つゆいなつまやいしの火
の●もへ立はかり□おもひきりしかや
みのよに●また月かへるふせいなりゑい
あきはまたヤ山^山たにうつうす□かけひ
とり●よるならてはかよひたまふなよ
人のなさけはよるにある□ひとふり□

「二八丁才」

●ひと村雨のあまやとの●ひやくしゆ
のきゑん□長はくほうがいにしへもゑい

うきゝに宿を□とらせ給ふなりけにや
おもへはおくるまの●やるかたもなし
わか心そなた

池田

△

「二八丁ウ」

ゑい池たのしゆくをよはほのく^源に

立出て●天りう川のはや瀬おも

心しつかに打渡り●そのいにしへの

さい行は●またこゆべきとおもひきは

いのちなりけり□さよの中山中く^源に

●わすれてすぎし□みやこともがらと

「一九丁オ」

思ひいつゝもきやうもまた●今ゆく

こまのあしは山●ゆくまもあらぬ大井

川三日立またればふじゑだやゑいやよく^源

此^源花とみつゝもうち過てうつ^源の

山邊のうつゝに●ゆめにも人に

あわぬなる月もこよひは清見がた

「一九丁ウ」

みほのうらはのしらなみに●かたみ

にそでをしほりつゝすへの松山かく

やらん●我身たへぬうき嶋か●はら

よりみればふじの□やれすそのに□

雲をひきはへて●まだ時ならぬ

しら雪のつもる日数はふるほどに

「二〇丁オ」

●するかの国をうち過て●こよひはみ

しまにやどりつゝ音に聞へし箱根□

上りくゝて詠れば●ほのかにみゆる□山の

面かけ打ながめ●かりうの和哥はおも

しろやあゝは^源あけばまたこゆべき山の

みねなれや●そら行月の□すへのしら

「二〇丁ウ」

雲となかめたまへしわか人の●こゝろ
今ぞおもひやるかんじたまへばしのゝめ
に●立春□みれば、こね山つゝらおり
なる細道をたどりくゝて小田原□宿
にこよひはかりねしてきけばお
江戸はほどちかややらくゝ

「二丁オ」

月見

またもござるよ我やどの●かきねや
春をべたつらん●なつきにけり□み
ゆるうの花の●さかりはいつかすぎはて、
●はやゆめの間に□さつきなかばと
なりぬれば心も□ともにさそわれて

九

「二丁ウ」

あまの小舟おにうちのりて●川くち
おもてに出ぬれば●ところもせまき

月見ふねかずをしられぬ人なれや
うたいこうたにじやうるりを●さみせん
こつゝみ打ならしゑいやよく此
かほにかゝりしみだれがみよのさ

「二丁オ」

いつに□わすりうか面かけを●酒もりな
かばと見へぬればかずなら□みおも
うらみつゝ●おふねのうちを見てあ
ればとしのよわひをもふさは□二八ば
かりとうち見へて花の□やうなるわ
かしゆさま●其たれ人とたづぬればゑい

「二丁ウ」

お名をばのさて□ゑもすまい□しやんと
させられたまりやせゆ●花のおかほを
つくぐと●目もはなされすがむ
はゑいあのみみさまはゑい伊勢の
はまぞだちゑい目元しほがゑい

そりやこぼれかゝるよ●こよいの月の

「三三丁オ」

こりしよにてまたもあふことある

べきか今おもひ□くもにかけはし

かすみに千鳥□そらとぶとりを手

づかみにおよはぬ

かた

やれやわかいしゆよふかきちきりし

田

「三三丁ウ」

うき人に●立たわかれこそものうけれ□あ、

われおぼたれかまつら船●こがれての

るぞものうけれいとゞわがみのものうさ

に□西をはるかにながむれば君にあわじ

の山見へてなおもこいますわがみ□い

つのなんどきうき人に□是松江のはま

「三四丁オ」

打ながめ□かたのうらにもつきしかば□

まへなうしほてこりをとり三十三

どのらいはいいやはねがわくばき

みに一たびあわしまのゑて大明神

とふしやおがみやよへや□あゝこよいはこ、

にかりまくらねてもねられぬこよ

「二十四丁ウ」

ひかなやれやわかいしゆ□是をきく

からは人とちぎらばうすくちぎり

てすへをとげもみぢはをみようす

いがちるが□こひぞまつちるになりやうや

御演出

さても目出き御演出のきよゆうかな

「二十五丁オ」

●まつ高砂の□松の月●おのへのかねの

明ほのに●きまんさい□おゝの松原

はるゝとさしてきぬれはひかさの浦

よ□扱もしかまのらくかんに●藤江のほ
せつ□加古の嶋山ゆふひこぼる、●から
かの嶋にたまもかろ●両間も見へぬさみ

十一

「二五丁ウ」

たれにゑいやよく此^正あまさかるひなの
なかしをこきくれは^本明石のとりやま
としまあれにみゆるはおもしろや此^正
きみのふねやら^{ア、サ}ゑしまのおき
に^{のほく}さて□千鳥かくれにほうがみゆるへい□
おふねなたよししやうれし

「二六丁オ」

新古筆

またもござるよひかしおもてのこひつひ
ようぶの見事さは●しきしのゑに□
かきねこずとふうぐいす野べになま
めくしのびねや●まつさく□むめを

かゝれたりはるのていかのしゆせきなり

十二

「二六丁ウ」

こよひいちやは□花のこかげにやどを
かりうやりんへやかかげいきよすけ
これつぐ□この咲れんげ●おてま
さしくもみことなり花のもとづな
ほたんぐわに□花によそへてわかをゑい
がのおてもありさりやこうぜいためよ

「二七丁オ」

ためいへためすけためうじ□どのお
てまでもたれにとうふうがふるう
筆こそみことなりゆくやみちとも□
こわたいのじに日ぐれてふか
くさや月はふしみのるんどのや●三
じやうにしどの□じゆらくけいおふあす

「二七丁ウ」

かんや●しんぴつなれどこの江戸の繪殿

●あそばす□ふでの見事さは心な

ぐさむわかのみちいやあきもこの

たつたのもみぢはや□しぐれにいろ

は□なをもこきんやしんこきんよわひ

久しきせんざいのごせんしけつき

「二八丁オ」

伊勢物語□そうきせんじゆのそのな

かにしきしたんざくかずをそろへて

おされけるろうじにまわりてなが

むれは□扱も見事なせんすいやせんくわ

木そうまのまへに池はすわまにほら

れけるなかにこいふな□きん魚けいくわの

「二八丁ウ」

ともし火に●ねもせでやどをかるも

草まこもうきくさ見てもなくさむ

あやめぐさ●ゆきてはかへり立もどり

こゝろとまるはそですりの松をなか

めて日をくらすそてつもくれん

岩つゝじ●まんぼくせんさうきた

「二九丁オ」

はきに●みなみはあおし東じろ●西

くれ□なゐに染わけの山をひやうして

つゝれける●こくはく□せきのいさごしき

みこしまへおきなびくひかへに手かけ

石ことにいろへのおきどころ□天地いん

ようのおもてまで手ぎはすぐれて

「二九丁ウ」

見事なりゑい扱またすそのに□し

げれ小松山やらく

みやこ渡

みやこあたりの里くやふしみ

ふかくさとはやわた●たけだのおさと□

いなのおざゝのしげりあい●わけゆく

「三〇丁オ」

そでのかずくやぎおんばやしのもら
から□うかれごゝろともろともに●

清水八坂うちすぎて●加茂川越る

しら浪のかゝるなめはあらじ□よしの

龍田のはな紅葉ちるをおもへばお

しまるゝ八瀬や小原のいやしきも

十三

「三〇丁ウ」

のは□じんやじやかうはもたねども●にほ
おてくるはたきものよいやは●四条を五

条をうち過て●ゆづしかさまにあふ

坂のせきの岩かどふみならし●山立□

いづるきりはらいこまにまかせて行

ほどにおゝ津打出の濱より□やまた八

「三一丁オ」

ば瀬の船にのる此かたゝうらべのそ

りやつまにはいやよ月にはつかは沖に
すむいやしほつかへずのそりや

あさがよいつまがぬれそる磯打なみ

に●かゝる小哥にほどもなく●石山でらを

伏おかみ□ゑいながめに□あかぬしがの松

「三二丁ウ」

やらく

たい平

やら目出たいのきみのよわひはみち

とせに●たい平□樂とおさまりて

ごすへはんじやうの御代なれば●きく

さも□なびくとぶ鳥も君にしたかひ

「三三丁オ」

奉る諸国くにく大名の□ゑいこの有

さまをきこし召●うらやまざるは

なかりけるもん外い●こまの立ともな

きよふに四方のかとめのたまのともひ

かりかゝやくきんくの●ここん□いろを
なすとかやげにやたゝゑい□きけんじやう

十四

「三三丁ウ」

のたのしみも●御代にはいがてまさるべき
ゑいやよく此松の葉はゑいとしを
ふるほといろまさるはいろとともに
深みどり●岩ほ□かたにいる亀も□ちよ
よろづよはかきりなし●いわる
きみのためしの此まつはや

「三三丁オ」

時なり

さても時なりこの君の●こいこう
目出とふましくて●天長ちきう
御ことぶきに□たみもうるほひ国もお
だやかにときはかきほの御ふぜい松に
たぐへて色ふかく□君のちとせをへん

十五

「三三丁ウ」

ことはゑいやよく此あまつおとめの
羽衣で●なつともつきぬごかんは□なん
ほ目出たやこたいけや●所も□ふつきは
んじやうし●ゆたかの御代ぞ久しけれ
やらく

御城廻り

「三三丁オ」

我はいなかのものなるがお江戸けん物
申さんと●初てこゝに□たひを品川
打過てこゝはほどなく芝□よ●まだ
あたらしきしんばし□とゝろくと
うち渡りあたごさんけい仕り●あら
おもしろの町の名や●今きてこゝに□

十六

「三三丁ウ」

名所きうせきみのなるが花に桜田打
すぎて見てはまん／＼きわもなく人も
ゆたかに□^①「すめる町／＼は●^②」目もおとろかす
けしきなり●^③「すゑたのもし」□^④「我も久
しきすみやかにおしろ見物もふさん
としばしたゝすみながめ」□^⑤「心ことばにつ

「三五丁オ」

くされぬ●^⑥「末ぢくしたん我てうそれ」^⑦
三国にならびなき●^⑧「昔も有しもろ
こしの●^⑨「かんよふきう」□^⑩「もの、かずにて
かすならぬ矢倉／＼のそのかずは玉も
か、やく斗なりしたはまん／＼」□^⑪「あふき
いれたる堀のうをきんぎよこいふなあ

「三五丁ウ」

やめかるもにかきつばたかづのつゞき
かはをやめ□^⑫「千鳥しらさき鶴亀ひな」^⑬
つるおしかもめ池のまこものみだれ

あい心いさみておもしろ□^⑭「そらで光り
のか、やけばからできんさんにしみに
月と日の光りあらそふことくなり

「三六丁オ」

さても見事なご本丸●^⑮「みなみに」□^⑯「たけ
きあたごさんにしに三王きたに明
神が、として●^⑰「きもんの守りたまへば
東に清きせいぐわん」□^⑱「あいに見へたはも
みぢ山とう所ごんげんさまのや御立な
され」□^⑲「いわいかしつき奉も●^⑳「げに有かた

「三六丁ウ」

く上下ゆき、のひと／＼は是をおがま
んかたもなしいや●^㉑「君が代のちよにや
／＼さ、れ石久しかるへきこいせいわな
おも月日がかさなりて廻り／＼ればお
天主の●^㉒「見上げてみれば八幡のししや
にさたまる白はとがとやを立出とんで」□^㉓

「三七丁オ」

とびやあかりて御代は万ねんちよ
ふりてもふてあそびしその

風情いよ此まことに

牡丹

扱もおもしろのなかめ事なる花

ぞのに[●]いろあらそひしなくの

十六

「三七丁ウ」

●わけやおもひ深み草はるは心もう

き草にゑいやよく此[●]ぬるゝたもと

あめがした□君をいよ松かさのよいく

に●月しろ見へぬ恋のみちいきの

松ばらあき山をひとりこゆらん

龍田姫いやもみちふみわけなく

「三八丁オ」

鹿のこゑしらきく□あき日こう□いろ

もちしほにそめがわやうきなを

なかすほうでう川[●]八幡倉はし打

わたりけふをこゝのへにさきいでて

しばしこゝにやとり木のこすへ

にせみのはころもを●かけしおもひ

「三八丁ウ」

そこ深き此[●]とう山の井の水清く

たちよるかげのふたおもて袖の

内よりほのかにも見へしは花のあ

か手ぬくいつゝむ心はせんゑかう●

其いろふかき小町しろ●たかあふ坂

のせき守も●つまべにくわへしなり

「三九丁オ」

ふりはゑいせんしうらくやゝとあ

かしくらせしふうき草●くわさかゆ

るきんちうばくゑい君の手くさに

手まりわれも□つくばねのみね□より

やんれはんせいとうたふひやうしのふ
しくも●^四とけては君の御心●^四けにあり
かたき御にはの花をかそへて名とり草

「四二丁オ」

●^四けんしの花のすゑまでもゑいその^{いんげふし}
名も●^四なたかきはなやふしの雪●^四さん
ごくしろにつくくらん●^四そよろ□^四た
ゑぬまん月の●^四日ぐらしすぎてい
つもはく●^四とふけつ□^四かくすむらくもこう
●^四やゑくもまぢるくぜのさたいやふけ^{いんげふし}

「十七」

「四二丁ウ」

ゆくまゝにやれこりやまかしよ天の
川はころもぬきてたなばたのいや^{いんげふし}
さそやこよひはやれうれしかろさは
こさらずやれあめはなし一とせつ
もることのはを○^{いんげふし}そろくむすぶ乱れ

「四三丁オ」

かみ●^四思ひを晴ていなんすかはや^{いんげふし}有明
しろに朝香山□^四しのめわけてこう
さんぬつとてさんすあさ白へに
●^四れいしのきみのおもかげも●^四けにい
ろつやはくわげんこうりよがんこう
にもすくれたりいや^{いんげふし}じやうくわみて
からよの花見れはへ^四あめによんく

「四三丁ウ」

よごれてこのあいから咲花はし^も
つおかしへ●^四さりしごげんのほどすぎ
て●^四かのげんそふのもてあそび●^四
よきひ□^四さまのお心もゑいやよく此
なゑきしろにへうき草のよ○^{いんげふし}せん
しやうしろになりける●^四せんさいはく

「四四丁オ」

にそふてのちいや^{さん大せつきやうかし}なをみやうかく

しとあらためてあまかさきにも

山の井の●もあんにしはしよとあ

さ日□ゑいそれでもとふやらうつくし

はよこれ小袖じやないかいのいや わかけ

もおわりげきんぎよく さまはふとや

「四四丁ウ」

ふと心●男こゝろは玉ぼたん●すこし

こゝろはこひなたの●とものにとくを

かたろいて●いつゝによりしつゝのめ

の●なひかに□しやんとたつた姫いややれ

てを引なやれくらはしをよふたふり

してぶらしやりこ●おもわくふりはち

「四五丁オ」

しほへに●てんとうとふりたきのくに

こう●花のにしきもさきわけて●さ

かりもはやくやすひべに●いさそうよ

うのひとおとりゑいやよゝ 此ところゝな

とろゝなあぶらよいゝさつざとろ

ゝやれしなものよほあいたしこなん

「四五丁ウ」

とした□そてのうちよりきものかてた

さほんにこれみや松の葉のありやゝ

●北斗の星のあからみて●はやあけ

ぼの、朝きりに●たちそふ□おとやさ

きのもり●そのかすゝはおゝけれど

●あらゝ□こゝによろい草●げに花その

「四六丁オ」

はしゆんしやうの●いこく□あたひほんせん

くわ●心をわけてふかみぐさ●ばんせい

楽とうたひけるやらゝ

八景

やんれ有かたき君のみかげもせい

てんに●みふねあそひのおりから

十九

「四六丁ウ」

に●ろひやうしにこゑをはりまがた□ゑい
飾万のよものその景色●ななめ□まさる
のどかなる●はるをまちゑてさくら
たい●こゑやすくとりちらす□す
かの嵐のいさきよき●おともひそかに
ほそへなるいや 軒の玉水とくくぐ

「四七丁オ」

まれしけくこされは人かする●ありし
ことはおもひての□ゑいしるもしらぬ
もゆふすゝみ●よのよしあしはし
やんはし●月にありくつむほた
で津田にそのまゝらくかんの●とも
よひ□たつや濱ひさし●おきなみ

「四七丁ウ」

とふきふなおさの●あらしほに入
乗ふねを●家嶋のきはんとうちな

「四八丁オ」

かめ●なみもうつろふのせきしやうに□ゑい
すなとる□わさのぬれあみを●ほしも
あへぬやかう山に●ふりつむ□ゆきのし
ろたへに●なみすますかへおとなしく□
ゑいされともけこうはさむそふな□ゑい
ねくさにうつるあをくと●しやうこは
しけるうらしろや●花のみやとてち
よとみし●十七八のひんしやんとゑい
やよく此はやるぬんくぬりがさだてゝ
やさしてきやしやぶりてしついとしへ

「四八丁ウ」

それかほんにまとかはやるぬんくぬる
かさこちのかゝらにきせたらはなへかつ
きへ●此いきほひを見てたもれ●よふて
うれして中のよい●中く嶋に夜
の雨●ぬれてしつほとしなものよゑ

いやよく此君か代はちよにや千代を

「四九丁オ」

さゝれ石●岩ほとなりて萬年の
ゑい龜山つくかねのおと●ぢかうに□つ
とふ入相のかすの船々あとききに君
をあふきて奉る●うちわの松の
よそまでもやらく

たから揃

十九

「四九丁ウ」

やんれあら玉のとしのはしめのきよ
ゆうかな●こよを重ねてたから船●
おいてに帆をあけまくの●かたしけ
なくもきみの●こいせい□名も高砂の
●松もろともにひなつるの□ゑいちよ万
せいとうとふ龜●たいくところほん

「五〇丁オ」

たはらゑいやよく此民もゆたかにたつ
くりの●すへひろかりのかすの子に●
うらしろ小袖ゆつりはと●すくなる
みちのかさり竹●さいはいひしにかく
れみの●かくれかさきて打出いの●小つ
ち打くかつて●悦ふ君をいわるたて

「五〇丁ウ」

まつる

きく

よの中のつねのならひもときう
つり人の心もしめやかに おしも
秋のつれくにながめにあかぬき
くの花 圀 たゑなる姿やさらしく咲

「五一丁オ」

みたれたる有様ははるにもまさるけ
しきかなけにとくおふき花の陰
立よりきけばその昔ちとふと

いゝしかみわらはほくわうまくらを
こへしつみによりてつけいさんにな
かされてきくのしたゝりめいとなる

〔二十一〕

「五一丁ウ」

文帝これを受給い花さかつきとな
し給ふ今てうよふのゑんとなる

〔付〕

かゝる目出たき菊の酒なかれをく
みてとふゑんめいすゑの世までも
つきし児花にこきく有りつ
ゆおあざむくきよく牡丹君もぎ

「五二丁オ」

よはいときよだいはくきやうすいよ
おふとはかさなり扱またりくき

とてむつのしなをゑらみつゝた

いりんしやうくわのへだてなく□しつ心
まかせつゝ□まんさくまんくわの心をよせ
しばしとてこそ打なかめきわす

「五二丁ウ」

ぐに●ははあおやぎにしけりあいくは
ぎやうたゝしく色つやも●かさね
はあつくあらまほしゑいやよく
此天の原ふりきてみればはころ
もの●雲井を照らす月のかほ●
大山まくしら雲の●そふせたか

「五三丁オ」

なる山うばのいや雪越へゆきを
さそへてさい此さやんれやまじや
きんそれはへ●しゝふす野邊のそう
せうこう●井筒によりしよりこふは
ゑいなりひら□通ひなれたるたかや
すにいや風吹は●おきつころんつ

「五三丁ウ」

ふらしやりと●かさおり烏子^{カウ}笄
ざしも●うち落されてせんかた●
なみの□よるへなく●ひさけの水はゆと
成て●互におもひきりつぼの●
きんくじやくほふほふ舞あそひ●松
はよりきんつるのこの●ひなの住居も

「五四丁オ」

はる霞●わうしやうくんの御所車□くるり
く／＼とめぐりきてゑいやよく此都^{ココロ}
いよこのわすれのなか都^{ココロ}わすれの大
はんにや●よれつもつれつせつ
かわも●その名異^国にかくれなき●驚
のみ山にたへなりし●みやうのいちしを

「五四丁ウ」

開くなるゑい連花^{はく}ほらにや深草の
●通小町のもゝよ草●かすく／＼いろく

の●目出たき御代のいはる草ゑい

千秋樂のためしかややらく

遊女そろへ

されは神代のそのむかしみとの

「五五丁オ」

付

まくばいそめしより●いもせの
はしの中たへず宝のとほその
明くれにゑいみなかみ清きことなれ
はいやな^{はな}かれをたてゑい^{はな}尾の町に
ゑいやよゑい□さかへく／＼て住の江さまの□
松のはいろは時はさま●やらとせさま

「二十」

「五五丁ウ」

のかねことにいつも姿は若さゝま
●にしきを□かざるきぬへさまい^{さん}や
みたか／＼かお／＼きたちみたそく

かつてんじやいのほのくんとんほんほ、んほ、
ほ、んほ、いや朝霧さまの御出しやいの嶋^四
かくれゆく船人も恋風さまに吹も

「五六丁オ」

とされ心はうちよふてんまで此のほ
りしらすに下り給ふは坂田さまの御事
いやしんてきよとんてきよなんぞ^四
我もおもひそうろう□うはきのさた^四
も金とするひとつはかいてそほしき
金太夫さまの御事いやこんどござらは^四

「五六丁ウ」

よいくもてきてたもれ□いつのお^四
山のよいくなきのはをへいや初花^四
さまの御出じやいの船路はるかになかむ^四
れはおかやまさまのこわいろを三味のし
らへにひきのせてつゝてんちりてん
つて、つとことのねをふる松風か峯

「五七丁オ」

のさまの御□^{さん}といやたそかれ時にかとに^四
立人はいかさま我をいやまつかしのぶか^四
のいやひんのしらなみこいのわかし^四
んこきんにつらねしさんせき

「五七丁ウ」

せいさんさまの御出じやこのこいしゆか^四
しのきみさまやさてくよいく^四
せんとは御状下されたれ共ついにへん
しのたよりもなくさてくぶさに
おもひまいらせそろへく候とつこい
そつこいあすはあふとかいたる文の

「五八丁オ」

筆をそめのしよさまの御事いや^四
色には出し我恋はものやおもふと^四

とはさんすかほにもみちのちりか、
るいや龍田さまのなりふりやたかに
かけを水か、みおもはゆけなるかほば
せは井筒さまの御事室ごじむろといよこのゑ

「五八丁ウ」

しまと室むろと家嶋とすしむかい
橋はしをいよこのかきよやれ橋はしをかきよ
やれ船はしをゑち川さまのお通り
ちやいのみやはとかめそおちこち
人もぬれてぬれかゝる信濃さまの御事
いやゆめと契ちぎりしたまくらにあか

「五九丁オ」

月かたのかねのねやあかぬわかれをお
のへさまのおもわくいや命いのちかけて
もよいそれは此君このきみそつこでうけだせ
三百兩此きんさんさまの御事ごじいやひよ
く連りのかたらいもそつちこつち

互の心からさきさま吉さきさまの御事いや

「五十九丁ウ」

おいにけらしな我われくる髪は白川のみつは
くむまで若山さまの契ちぎりやいと
ころはんじやうのためしなりやらく

嶋廻り

やんれ一よふの船をうかめるうみつらに
●なみしつかに□さかうしかまの浦の

「六十丁オ」

けい（沖）にかずある嶋の名や●はし
めて見へしかみ嶋やゑいものゝふ
のかさりおき□たるくらか□け嶋●なら
ひしふと嶋うはしまや●たんかを打
なかめいやかしまやのしまおこの嶋
行船ぎんせんのしほはそめねとくる嶋や●

「二十三」

「六十丁ウ」

ほうぜにつゝく西の嶋やけやこから
打過て雲をいたゝく高嶋のいろも

時はの松嶋やこまもかすあるあし
なみに人のよわるもなか嶋と三つの

かしらにおつぶらや●こつぶらになふ

かつら嶋これやいわゐの小松嶋ゑいやら(く)

「六十一丁オ」

浦うらふれてあわしの瀬戸に鳴しか

は●家島がさきに□つまやこもれると

つらねたまいしわか人の心ゐんげに

黒ふごや□はるをしらするたか山の●

かすみもかたく□みゆるかなこ嶋しつ

もからみに女なゆかしき君嶋や

「六十一丁ウ」

●かんざしよす□るかつら嶋たれか

おゝいに投石の□池にはしゝまをよそ

ほひてかほどなにある嶋くをめ

くりくばものも□扱もしかまはほど

ちかやおふねなたよしじややらく

櫻 摘

「六十二丁オ」

やんれさくらさく●とふ山とりの

したりおの●なかくしほも□あかぬ

いろかをみよしのゝゑいやよく此

吉野、山をゆきかとみれば□ゆき

では□あらでうゝやアゝこれの花のふかき

よのうゝ●かへさはわする花のものとゑい

二十四

「六十二丁ウ」

をすゝむるさかつきの●たひかさな

ればあ●さきなる●さくらの花もひ

さくらになれは田もとはしほかまの

●うらめしかりしはつ風も●よき

てはふかでちりぬれはいやあおばま

でみれば心もとまるかな●ちりにし

「六十三丁オ」

はなの名こりぞとつらねたま

へしことのはを●げにことほりと

打なかめ●またくるはるをまつかへ
にやらく

松揃

やら目出たいの鶴は千年亀は

二十五

「六十三丁ウ」

万年□まつはちとせの世へへて

●はいろはおなし深みとりかゝる

めてたきまつなり□いこくたいこく

我てうに松を目出とふいわゝる、●

先づ正月にはかとまつ□かなたこなたと
いわゐけるゑいよく此●君か代の久し

「六十四丁オ」

かるべきためしにわ○かねてぞ

うへし住吉のまつやよゑいや●お

もしろ松のめいぼくお、けれとなを

もその名は高砂の松のみとりもき

みか代□さかへさこうる目出たさは摂津は

りまのさかへの松と□和田のかさまつ

「六十四丁ウ」

かうやさんではさんこうの松と□志賀

唐さきの一つまつ今にたへせぬ名木よ

おとにきこへし越前の●しほこしま

つとはこれとかやか、の国てはあたか

のまつと□はるくたつね□こ、にするが

のやみほの松はらせいけんじことに

「六十五丁オ」

北野、おいまつと●すくなる□御代に

住よしのまつは時は色そかし

ちよもとしふるはることに●なを

いろ□まさる姫こまつやうく

伏見下り

やんれはんせいとうとふひやうしの

二十六

「六十五丁ウ」

の伏見より●りうとふけきしゆのお
船に召れ□さほをさすひのくもりな
くゑいゆ、しきおんなとりかぢや
おもかちに又まきあくるみすのつ、
みのはるくくと□よどの川せのよどみ
なくなみの花こそはるはまたまな

「六十六丁オ」

くよすらめ□なかもあかさんと心う
きつの明神の●かねこんくときつ
ね川男山にし立たもふいや因山やわた
のみやゐと伏拝み●けにやまこと此
かみはゆみやまもりの深ければこぶ

あゆみのひまもなく□ゑい橋本やま

「六十六丁ウ」

さきうちすきてよそにみなすと
いゝなから心とゝむるせきとのゐんの
むかし●わすれはせしなたび人の
まくさかりこやくすばやしんきゑいやよ
く此さうどのゝあしのつ四のくもゐ
いせ人たび人□なればおゝきいそ嶋。きん

「六十七丁オ」

やひらかた天の川みちやかたの、
草まくら●なるゝも心からさきの
●うきよのちりのあくた川てぐち
みしまへこきゆけはこやのさん
しやうはこれとかや□ふねにほうまく
はしら本●かちかふおとのせんしやうが

「六十七丁ウ」

花やいまぎりうちなかめ□はるの

けしきとさゑつれる●とりかいたれは
むめさくら●三本松は天神のうへし
たまいし佐田のみやきぬかたもと

におるもんの糸もうつくしこばんしま
ゑい おもしろの花やさかりや□なが
（あ）

「六十八丁オ」

めもおゝきめいしよかなひとつや

江ぐちをうちすきてさんほうじ

川原に□つくとのみわたせはすい

たの里とよこなたにしもしまへ

たむら あめはふらねと森□今一

さんばたいかいおんぼらじまたきな

「六十八丁ウ」

つにはあらねとも●わがいと□なみを

しつのめの布をさらしのしゆく

こへてゐるやはる日のながらのお里□

宿をかすかいの●そのあるしや源

八か引あみ□しまや川さきのそら

も心もはれゆけはなにわあたり

「六十九丁オ」

の明ほのに●はや大□坂に付にけるやらく

時そと

やんれ時そとてさきものこらず

ちりもまた●はしめて□にわのいと

さくら●見にくる人はしゆゑんのはし

め□まふやうたふやゑてんらく此

「二十七」

「六十九丁ウ」

かしわきのゑもんなまりをとんと

けてゑいやよく此おとろいてこの

にけたくよみすの此うちのから

ねこと●うたへはこれなるにわの梅

いやいちの小枝によいそれはさつき

そつこでくよい此くくうそかやと

「七十丁オ」

まりでことひくひ、きでのほいゑい
やんれはながちるおいて

御船おろし

やら目出たいの御船あらたにつく
りたて●^遊きん銀しゆぎよくもちり
はめて□^遊たくみことなるおんよそおひ

二十八

「七十丁ウ」

はこれや此●^遊りようとうけきしゆも^四
かくやらん●^遊にしきのともつなら
んのかち□花鳥風月のおんあそ
びけふにしようしてせんしうばん
ぜいちよにや／＼を高砂のいや^{さん}松の
みどりもはるくれば^遊時はかきほも

「七十一丁オ」

花の山●^遊けふにしよふしてさほ

をさす君をいわゐたてまつる

道中 巻

やんれ玉ぼこのみちの／＼たる御代
なれは●^遊くもらぬ月のみやこより
花のお江戸のみちすから●^遊よる(と)

二十九

「七十一丁ウ」

おれ共ひるゆけとしゆうしさいに
目出たふて●^遊名所をななめこせき
をかんしまこに拍子を取らせつつ□^遊
ゆさんなからの道とかやとまり／＼や
むまつきを京をたち出よき道^{三十八}
つれにこの逢坂の^{三十八}せきの清水で

「七十二丁オ」

かけみ^四れは●^遊まこやひくらんのり
かけの今は大津のうらを過●^遊草
津にやとをかりねしてしかと

一よは石部のしゆく里はこゝろ小里てやま
よせてなれとよのま子のこいするこいする

水口をこまこまに打のり土山をこゆる

「七十二丁ウ」

すゝかの坂の下ッせきの地そうをふし

拝みこゝろ代は百年の龜山やゑいやよく

此千代までもこゝろこゝに住居をせふの

しゆくこゝろ率いこゝろたれかみてさへかたそふ

なこゝろお、有かたそふ石薬師しはし

やとおばかりそめて人のなさけに

「七十三丁オ」

ほたされてこゝろ五かはた、ぬ四日市（天）

氣よければ船にのるこゝろくわなの渡し

やこのつきにけるやらく

同 二

名所くは宮につくこゝろかたしけなくも

このかみはへりはあつたの明神な

三十

「七十三丁ウ」

れは信あれはかならずこゝろふうきゑい

花になるみがた花もちりうの宿をこゝろ

過人に心はおかさきのこゝろしゆくに入ぬれば

馬方こゝろとろりくとむまおひかけて

ゑい花むらさきのこゝろ藤川やふけゆく

よわもしらくとあか坂過てこゆの宿いや

「七十四丁オ」

笠をかたむけ田うたをあけていやこゝろ

そとめのうへしさなへのいつにまにこゝろ

こゝろくろみてはらむ吉田かなお、な

はふた川ときくなりこゝろみへぬふちせの

あるしやなしたれかおすへてしら

すかやお、今見る水にあら井川こゝろ

「七十四丁ウ」

まへ坂とふれおもしろやさ、んさ濱こゝろ

まつのしゆくを過れば天りう川●
わたしの船に打のりてたんだおせ^{さん}
お、せおさしませおしてお船のうゑに^{いん}
へいとろ

同 三

「七十五丁オ」

御目はつかしや人のしなこ、は^国
みつけのしゆくとかや●風ふく^国
ろいを過行ば此きしへに□浪はか
けかはや西坂のわらひもち□やあ
ねるゝらんかなやのしゆくにつく
かわるふちせに大井川たがおいそめて

「三十一」

「七十五丁ウ」

しまたと名をはつけつらん松に^国
^{はらふ}さくふしゑだや日数つもらんおかべ
のしゆく□そこでたぬきのはらつゝ

みこのひやうしをとりてうつやへい□
うつ山邊を過行はからな馬方く
つのねも●まりこのしゆくやたかゝらん

「七十六丁オ」

たひをするかの府中につけは□あ
たりにおゝき名所かなこのゑじり
をすきてゆくほとおわすか
さすにねつおきつすまはみやこ^{いん}
かゆいそれゆいかんはらをいやふし^{いん}
のお山をや^{ア、}それふしのお山はうし^{いん}

「七十六丁ウ」

ろにこさゝる^い□みほの松はらまへに
見ていつもゆさんをする人は●よはよし
原やはらの宿●ぬまつときけは
いにしへのあやめまこものおさとや●
雲まもいつの月かげこよいみしま
のしゆくにつくみ代は目出たふいつ

「七十七丁」

までも●おさまる^{はこねのかし}の
木坂を●こゆれはお江戸はどちらか
やあさのおたわら打過て山うし
ろにお、磯の□しゆくをすくればひら
つかや●藤沢とつかはいそきけるみ
ちはかほどかやにつく硯りをな

「七十七丁ウ」

らし筆をそめ●またいとけなき
子供らがいろはをかきなす□しゆく
の名やかな川●河さき品川うち過て
御代は萬年末代の●お江戸に□はや
くつきにけるやらく

船さい文

「七八丁オ」

仰く^{はらい}清め奉る●御船玉
の本しを□たつぬるに●かうていの臣

下に●くわてきとい、し人ある●有
時ていじやう池の面を●みわたせは
一葉うに●のりたる□くものふるまいたく
みて●船をつくりたり●扱我てう

三十一

「七十八丁ウ」

にても□紀州熊の、権現やゑいやよく
此御山より九本の太木とり出し
●伊勢の国二見か●うらにして七十
●五間に□やらいをゆい□七重にしめはり
のほ、んよ●その八重垣のうちにし
て●船を作りたまふ●おんとき□もろ

「七十九丁オ」

く^の●神たちあつまりて●第一住
吉大明神●船玉いわるおさめ給ふゑい
やよく^此先海はりうくう界のしき地
なりふなそこは八大龍王とも名付

給ふなり 棚か三かい上はたなが正八まん
大ほさつ中たなが春日大明神共名付(給)

「七十九丁ウ」

梶木はあわしまの大明神 ろかいひ
沙門天おもてはくんだりやしや明王
ともはこん大龍ふ大日如来と名付給ふ
なり 船玉の本地は十一面觀世音つ、と
柱は天照太神宮天のさかほことも名
付玉ふなり 蟬口車はうおう童子け

「八十丁オ」

た打廻しは日本大一大りうごんげん共
名つけ玉ふなり帆は法花経の八の巻
右手の手なは、金剛かいめての手縄は
菩薩界にもひよふされたり 帆あ
しは千手くわんおんとも名付玉ふな
り みなははつをは文殊不現梶はす

「八十丁ウ」

い神なりとこはあたご大こんけん苦は
天人の羽衣となつけ玉ふなり綱が

三本男綱女綱とてこきよう此きつな
なり またはゑんの行者のかいのをにも
ひやうされたり みおしは三ヶ月の御神
たいさかりはしらひけ大明神ながへの

「八十一丁オ」

しやくは弁財天王共なつけ給ふなり
しやたつはこうもく天 戸たては天まの
岩戸なりよかみは高間が原あまは
こんこうとうじ共なつけ玉ふなり 船
印はぼんでんたいしやく 貫抜は日天
月天碇が三ほふこうしん あかとりは

「八十一丁ウ」

正ほう天王共名つけ給ふなり 垣立は
二十五のほさつ まくは天の二十八しゆく池の
三十六きんなり みさほか三本一本に

てはゑんの行者の金剛つへ共なづけ
給ふなり 扱一本はしゆうしさい天神付
の御しやくなり 又一本は不動明王の

「八十二丁オ」

りけんとなつけたまふなり 江戸吟なおし
まこうぶくおんてき しゃうめつくわん
しやうおろしたてまつる あら有
難の御船や 大はんにや はらみつの
かちのこゑかい中へのり出し おもふみ
なとにつきにけるうれし

「八十二丁ウ」

住吉詣二十一かわり

やんれ君か代の久しかるへきためし
とて うゑをき玉ふ住よしの 松吹
風にゆめさめておもひたつこそかみの
つけゑいやよく 此道しはの道の
ものとして茶やすたれ なかれを立

「八十三丁オ」

しおもかげやいやかけこそうつれ
川水にこりかききよめ住よしの
はま路をひろふ千鳥あしいや
つれにひかれていつとなく あけの
玉かきみしめなわゑいやよく 此ちはや
ふるあまの岩戸におのつから ありし

三十三

「八十三丁ウ」

神代のかつら草いやいろこそはるの
空なれどなつ草しける最中なる
秋のお花はそてのふゆいや 雪かと
はらふ四方のていこれはなにさませ
んきやうに いるやあやじやみちと
せにいや いちど花咲はんほ、ど、んど、

「八十四丁オ」

つこいよそのやれその桃はあり

はこりやどんどへ●しやうがぬすみし
るりのつばいや●ひもたかきうち
葉おいらくの老をたすくる竹の
つへ●すをふしこめてゆく
としぞいやくちやせましやら

「八十四丁ウ」

んかんに●馬もすゝまずひさくり
げいやしはしやすういやれす
とへは松にこたへぬ風ぞ吹しやんと
たれおかも●知る人にせん高砂のいや
松はむかしのみしりこし●あな
うれしうましや●いつくし花や

「八十五丁オ」

どの●是ぞことはの花のゑんいや
その花たもれ此たびはぬさとり
あへぬかみまいりあわしまかみ
とすみよしとめうとにて●いもせ

をまもる御ちかいいや有明の●つれ
なく見へしわかれよりおのがなく

「八十五丁ウ」

ねはけいとうけいやきみか手なれ
の手まりの花はひふみよこゝのよ
とんとおちて●かたるなのおみなへし
●かみとりあげてなでし子の草
はのにさくあた花よいやおらはとく
おれ●ちらぬまにさつきのゆりに

「八十六丁オ」

ゆりかけて●さつとゆりかけこひ
めゆりとけてそいねのとなつよ
いやみせに盛の花なれは●かみのま
にくおりはへて●いざくかくらを
さけんそゑいやよく此おのがとりく
やれ打ちならすたいこひやうしにすゝ

「八十六丁ウ」

の音がと、とんどからくへ●てじ
なをつくすきねがそで●うるはか
ちりきしんとうのふしぎなり□
きくもごたくせんやらく

七つかわり

やんれしのふれと●いろには出し

「八十七丁オ」

我恋はものやおもふとおもひし

きみがゑいやよくみやまかつれの

うくいすのまた里なれぬこわね

にてたつねられたよくむねはと

きくじやシヤハうれしへ●おらから

よしやいつまでかいわで月日を

三十四

「八十七丁ウ」

すきぬかとゑいさしていかにしのば

んとおもひそめにしころよりも

あへすおてをとるやれ手をとるな

やれ手をとるなよそのたもとし

りもせで●そのとき君のおことばに

此我はうき草よほうやよほいく

「八十八丁オ」

さそさまはみつかさそふみつおばま

つばかりしやさ、さんからはぬれ

かけたしゆんできたぞなは、し

ゆんてきたそなたいくこいはくなさ

てもしゆんできたそな与兵との

よいくさつさよい此まことにさあ□

「八十八丁ウ」

おもひさひよくれんりの中となる

ありや、おとりはありやくはつは

よいゑいくふりたすかいなにあ

くまをはらひうちこむ手にはじ

ゆふくをいたきせんしうらくにはた

みをなてつさすりのふしなもの

「八十九丁オ」

よよいくくゝゑい扱まんざいらくには
命をのへつのはしつゑいさて

江戸めなおし

あいをいの松の風●さつさのこゑ

かうたゝねの●まくらにひゞき目が

覚て●おもへはこれはなかくゆめしや

ゆめに

「八十九丁ウ」

魚揃

やんれうをの名をおよそあつめて

わかにしてふしもおりくゝいりさ

けの●中にも梅のはなかつほゑい

やよく此見て□もよやあしもよし

のゝさくらしい○ほうてう風にもふ

「九十丁オ」

かれてや●うろこちらするもみち

ふな●みつのみとりもうをこのみ

魚もこい路にやせの川ひげをしま

んかなまつらがぬめりせつたの川

うなぎたてをつくしてしくちの

しそこちにちぬしやくほらさ

三十五

「九十丁ウ」

らさけて浮世くるひをするめいか

さかなめせとてさるふりはふるはす

ずきやあめのうを●村立てはくも

たこの●くらけのかけやかくすらん

●海にもいなのお笹原そよとはかり

はふくと汁いや岸陰にすむのふ

「九十一丁オ」

このもしやな柳ばいまたの●かみを

けつるかくしあわひちやせんやつこ

りやさとうたふたるいやあふら

たら／＼とろといや^付かねつけて

けんしやふり／＼してたんこふりの

●けしやうをすれはつやもよくおこ

「九十一丁ウ」

御前のか、みうを●いろしろ魚も□

のしろもおやにそこしんそこにべ

のかすの子供のよふひくはにしん

からぎけなまさけの●あぢにも

ますやあゆのすし●またなま

なれやうし丸のすしのうゑなる

「九十二丁オ」

石かれもつりのいとよりかけこたい

ゑいやよく此^{さん}おもくともひきやげ

とゑいや／＼さら／＼ひきなづし

●^付つきの出しほもいりしほもさせと

ひけともまなかつを●いそかわしげ

に□^は今もなみのうへよりも●とひう

「九十二丁ウ」

をのひれをのし●たちうをさや

さめしやちほこの●あらおそろし

のわにの口ごまめいわしをゑこのみ

にこのむくしらやあふらうをあ

んこばけらに嶋めぐり●おひれを

ふるはゆき魚のしいらせんじんちや

「九十三丁オ」

ふくろの●ば／＼らもさこのいろ／＼も

きんぎよぎんきよのたわらこも

くるまゑひすのたからか●おりよう

りにん^{さん}いつもお目てたやのこのは

まのまつ^付枝もさはよるかますのさよ

りゑんゑそはんはお、こ哥てしげる

「九十三丁ウ」

初 春

やら目出たいのはつ春のゆきひ

おどしのきせなかは●^四小櫻おとし
となりける●扱また□なつは卯
の花の●かきねの水にあら井門
秋になりてのはいろはいや^{さん}いつも

「九十四丁オ」

いく^付さにかついろのあやもみぢま
かふにしき川冬は雪ねのそら

はれて●兜の□星のきくの座も

●みなはなやかにおどし毛のおも

ふかたきはうちにとる●我名を高く

あけまくの●つるきはこにおさ

「三十六」

「九十四丁ウ」

めおく弓は袋をいたさすし●

ふつき□御よと成にけるやらく

花 寄

さんせきおりさきいつる花の其^四

かずたつぬるに●はい花と咲は天
しんの●おしませ給ふ□梅は匂ひの

「九十五丁オ」

年ふりてすめるそのみぞゆた

かなれ牡丹しやくやくゆりの花

●^四いろこそかわれ我おとらし

さくらみたれてほけの花はな

に心はなでし子の□さてちんちやう^四

き^四はかれても匂ひある●人にはな

「三十七」

「九十五丁ウ」

れて菊のはな□いつまんまでもお

とまりあれよさのみ□いそきた^四

まふなよ●あひ花より外に心とめ

●なくさむ時は小うたにていや^{さん}せ

きちくの花はゑい^付見るたひ事に

●そりやこせきこいしやうのほん

「九十六丁オ」

ほゝゝい□千よつはきに岩つゝし
水にことおやかきつはた池の
みきわに八ツ橋な[□]にふ[□]くねるおみ
なへしいや^{上さん}たれもきし花色[□]
ろもほともなく●人の心のかわるつ
らさよと花にさんしゆの和哥の

「九十六丁ウ」

やくはなはとれよりくれなる[□]くし
かねたるむらさきの所くはむら
きへて庭[□]のうらはきうらがれ
て●我身[□]人[□]やしるらんあさかほの
●またみぬ[□]時をまちなねて花は[□]
しほれてゆふかほの●そらゆき[□]の

「九十七丁オ」

ほるふしの花●いろこそこれは山
吹のむねの連花にもくれん

げ●てまりのはなにのふせんや

●そふよの花をよそへつゝ●い

つれ□花は水仙花此はなおや

かしま

「三十八」

「九十七丁ウ」

我はとうくいなかのしゆんれてこ

さるめくりく^付神の社をたつぬ

にゑいやよく^{上さん}此ちわやふるあら^付

有かたの御事や●天照太神くまの

のこんけん^{さん}まことやらなかしま浦

へは^付そりやみろくおふねがつい

「九十八丁オ」

たといやともへにわな^{さん}いせとかす

かのそりや中^付はかしまのおやしる

いや^{さん}天ぢくはなちないなげてそよ

そりやた^付ゝらふむかあゝいやきこへた

いやた、らおはなにいとなふみそよ
付 そりやた、らたんと いやは八つなるいや

「九十八丁ウ」

天ちくのなくもあいからそりや十三
付 の小姫がよねまくいやよねまかば
なたゝあもなまけかな そりやみ
ろくつ、けとよねまいぎおん

しやうしやに梅の宮、かたしけなくも
八まんの御立、たまふみやしろを

「九十九丁オ」

心しつかにたつぬるに、そうし
かみの御かすは九万八千七社なり

高まが原に、神そまし、すが
神のふもとでいさなぎいさなみさ
まの御事よ、我らがこきようは出雲
国に立玉ふそさのみこと、されは神の

「九十九丁ウ」

御ために、そふ政所、こんとあゆみを
はこぶともからはたれかりしやうを受
さらん、此、こりしやうと受とりて

弓矢を、名おば高砂のまつはや

きくすい

またもこさるよせんしうの、よろつ

「百丁オ」

よめくむきくの名を、あら、うたひ
かそふれば、まつばんせいのか、みとは

くもらぬ、みよにうへそむる、千代のわ

か松若みとりゑいやよく、此君かめくみ

にはくれ竹のそりや世、をかさねて

ともしらか、都のふしの名も高きき

「三十九」

「百丁ウ」

けんしやうかやはんしやのきのたち花
かほりきて、むかしを忍ふそでかさの

●はつれ雪ふるほうらいの山はうこかぬ
ゆたかさを●つばさならへてまいつ
るの●岩ほの亀にことふきはゑいさんいでん
しゆ車のかきりなく●めぐるさほ付

「百一丁オ」

姫たつた姫●いろをうつしてかくれ
みの●かつれかさきてみたからを●う
ちてのつちのしんこくはゑいいやよく此
つきぬしるしやかくらまい其さんみ手
くらのたえやらぬ●なかれのすへ付
も吉野川●水むすぶ手も花がさ

「百一丁ウ」

の●句ふ心ははるめきてゑい月さんふしの落根の都
のみすの内●にしきのしとねいつくし
み●四海波迄おさまれば玉の盃取く
にかそへつきせぬきくの香の●其した、
りか谷川に●うつりなかれて今もな

を●ちとうのよわひしらきくいや花さんの

「百二丁オ」

姿もほんほゝとんとつこ付いいよそ
のまゝにありはこりやとんとへ●七百
才をたもつとや●つきぬためしは
水清く●なかれのすへもにきわひ
て●のめはかんろもかくまでと●せ
うくきくのまひあそひ●ことの

「百二丁ウ」

は草もよもつきし●つきせぬみ
代はまつたいのやらく

春立つ

やんれはるたつと●いふばかりにや
ひめしなる山もにきわいてけ
さはみゆらんまつのはの●千代に

「百三丁オ」

や千代をさゝれ石ゑいやよく此

かさねかわらけななんく^四なはんはよ
ほらはほいとそだてまつる●くんしん
からくし民もゆたかにすむ月の●
めくれはころもいさぎよきしてさ、
んく^五うれし目出たのわかき様

四十

「百三丁ウ」

はてかいたのこの千年もいきの松
はらやんはれいよへそれわがゑた
もやよゑいくさかゆるゑいくはるも

明德

やんれ明德の●あきらか成し

此みよにすめるたみとてゆたかなる

「百四丁オ」

君のめくみも久方の●雲井にま

がふうみづらに●船こぎ□いたすさ

おのうたゑいやよく此^上高砂や此^四

うら船にほをあげて●月もろ

ともに出しほの浪のあはしの嶋^四

かげよりろうのおとかかりころ

四十一

「百四丁ウ」

りくときぎいだしてつりする所を

つたところかいやはお目出たいよのと

出小うたもおもしろややらく

時なり

さても時なりこの君の●ごいかう^四

目出とふまし／＼て●天長ちきう

「百五丁オ」

●御ことぶきに□たみもうるおふい^四国も

おたやかに時はかきほの御ふぜい松

にたゞへていろふかき君の千とせを

へんことはゑいやよく此^上天津乙女

のはころもで●なつともつ□ぬ^四

ごゝんはなんぼ目出たやごたいけや

〔四十二〕

〔百五丁ウ〕

●ところも□ふうきはんしょうし●ゆ
たかの□みよそ久しけれやらく

徳若

とく若にごまんさいとよきみく

いたればしんなまた□めくる月日や

おくるまの●くるく和水車●みな

〔百六丁オ〕

かみ□きよきことなれはいやはなかれに

うかむたみすくわん●其なも今は

たかさこのまつにこまつのかみとり

●よろつよ□までも住吉の●ふた

はの松もおいもせでこれにたぐ

ゑて御はんしやうの●みきわの亀

〔四十三〕

〔百六丁ウ〕

も千代鶴も●きまんざいとう

とふたるかゝる目出たき折からに●

ごしゆゑんなどとはしまりてそ

こて与太郎にさかなとあれはゑ

いやよく此こよい天まのはしく

きけば酒はたる屋のななじみの

〔百七丁オ〕

さわちのめさよへさあんあゝと人

まですゝめわれはしこてこくよふ

いほれくたさあをかしへ●御酒も

りも過ゆけば●千秋楽とうた

いけるやらく

祝言

〔百七丁ウ〕

鶴と亀とが舞あそぶ鶴と亀

とが舞あそぶとざゝぬ御代も目

出たけれ

文化十一亥 正月 写之

望月 佐七

古宮 覚兵衛

川中 与三次

「百八丁オ」

室田 惣左衛門

野村 左之助

山田 甚五兵衛

河村 喜八

瀬川 四郎八

後に儀藏改名
高嶋 唯助

時右衛門也
大山 源三郎

有本 与三郎

魚田 勝五郎

中嶋 与兵衛

「百八丁ウ」

多田 留次

下里 勘左衛門

岡上 伊作

高嶋 源助

川中 惣九郎

益田 門平

豊田 惣兵衛

角谷 源左衛門

「百九丁オ」

酒くどき

まつなら酒のへなら酒ならは

よふたさお、一はいな なら酒な

らばゑいくな さらば名酒をし

きになぞらへはなしてみま

しやう□はるはまつさく梅の酒とや

四十四

「百九丁ウ」

三千年に一度は花かきみも

うなるせいわうほうかも、酒しやう

らくかしやうの風ふけは花ふり

ともなつけたりさん夏はすゝしき

かうのいけとやしつけみつゑ川にて水

あわもりさん秋はさやけき月と

「百十丁オ」

争そふしろ酒じやうくんつけこみ酒

はかたのなんげんくけあつた

ものではなにとねるやうはゝとみいさのくねり酒は

ろりんくくゝとんとろりとねる程

にありやくさんやあこのくくゝは

つはようたさつは此ようたさのか

「百十丁ウ」

けごへ菊の酒にもはなしかござる

の□もろこしの事かとよ□しうのぼ

く王の御時ちとういゝし其人てう

あいのあまりにまくらをこへし

とがによりてつけいざんにながさ

れ□きくの其ふにいよ住たまへ□ほ

「百十一丁オ」

け□きやうのふもんほうの二のくを

さつかり□きくのうらはにかき付

玉ふ□雨つゆのかゝるおとははらん

らくはらんらくしつたんく其

おいしたゝりかたまはりて此雲

ふしとなりての□いのちなかへの

「百十一丁ウ」

菊の酒我てうにわたりてかゝさむ

の国の名酒□きてみればらを

ばへきてみわらをばようたささん

おゝ一はいな一盃さんならば肴をもふ

そみかさくゝと二三度よへど□みかさ

てもせてちんたのわせた□ちんた

「一二三丁オ」

なに、しよそつちてのめ□し
やんさせみかさ□やあしやんとした
こそみかさはよけれ□あまりち
んたのしたゝるや□しやんとさせみ
かさ□さてもゝほいやゝあ
いをしよとはそりやきまゝよな

「一二丁ウ」

とふしたな酒なイヤハ人にさすな
らこんぎやうゝぎやうこんぎやうこ
んしたにおけよふたやつさそつち(て)
せこれゝゝおさへた此おさへたの
しやうなら亭主が内なるさかなは
ほんじや山鳥ゝゝならばそこら

「一二三丁オ」

てしめろ□まかしておける此ま
かせがしよならふゆのきはまた□あ

「一二三丁ウ」

られみそれに□あらき酒をば□ひ、
の酒にあたゝめさけにしやうちう
すきたらいたみとならん酒くわ
酒くわへてみりんしゆにんとう酒

のましはりはふどう酒にきはまると
げこも上ごもこへをそろへてとう
いやゝとつと一度にほうめい酒□しきを
あさりといわるおさめてこゝで
樽の口をきりゝしやんとねじや
あけてそつちてせ此 しん酒

「一二四丁オ」

はうちにかイヤ るすしやはそつちて
せ此しん酒てしたをなやしたや
あしたをなや□□□んれふる
また酒のへ□われふる酒のようた(さ)

お、一ばいなみよもにこらぬす
み酒やみよもにこらぬすみ酒や

「一四丁ウ」

花のお江戸の名酒かな

四拾四
八

印（朱印「下里蔵書」）

「裏表紙」

下里家ハ元寛永年間ノ頃三州前橋ヨリ姫路

藩主ニ随行シ来ル而シテ家世々姫路藩御船手

御歌方（御船手ハ現今ノ海軍ノ如キモノ）タリ其

歌詞ハ則チ是ナリ父磐存世中此歌曲ノ絶

滅ヲ歎キシモ時代ニ適セサルヲ以テ之ヲ受クルモノ

ナカリシ此歌御藩主乗船ノトキニ限り歌ヘリ藩中

御方ハ十名アリシモ皆离散シ故ニ此歌本唯一

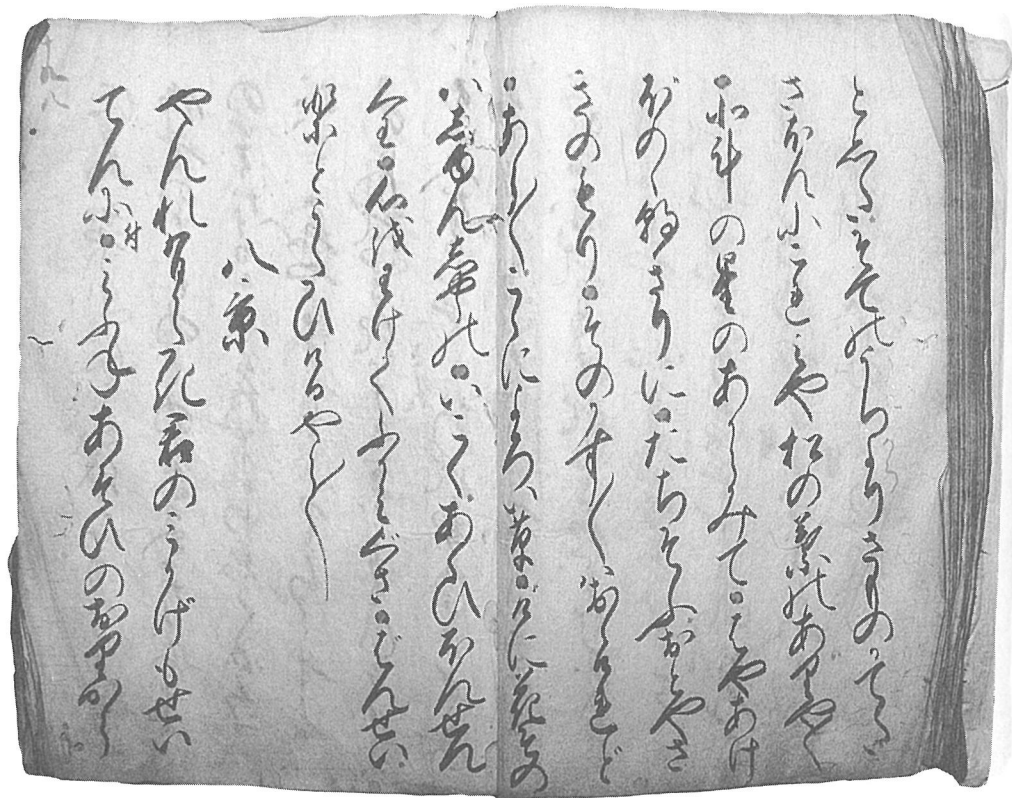
冊アルノミト父ヨリ聞ケリ故ニ此意味ニ於テ子孫

ニ傳ヘ家系ヲ知ルノ一助ニモト茲ニ誌ス

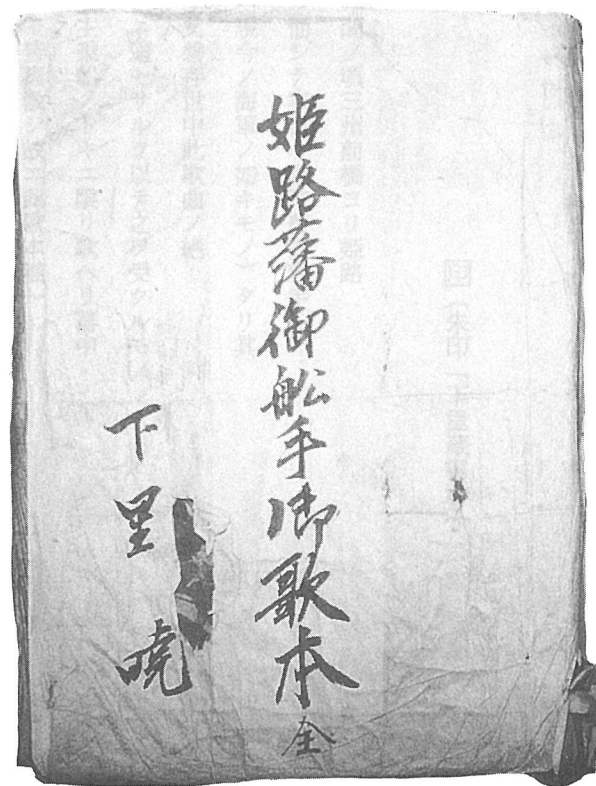
紀元二千五百九十一年 昭和六年一月

磐 三男

曉 記



(写真2) 新牡丹末尾・八景(飾磨八景) 45丁ウ・46丁オ

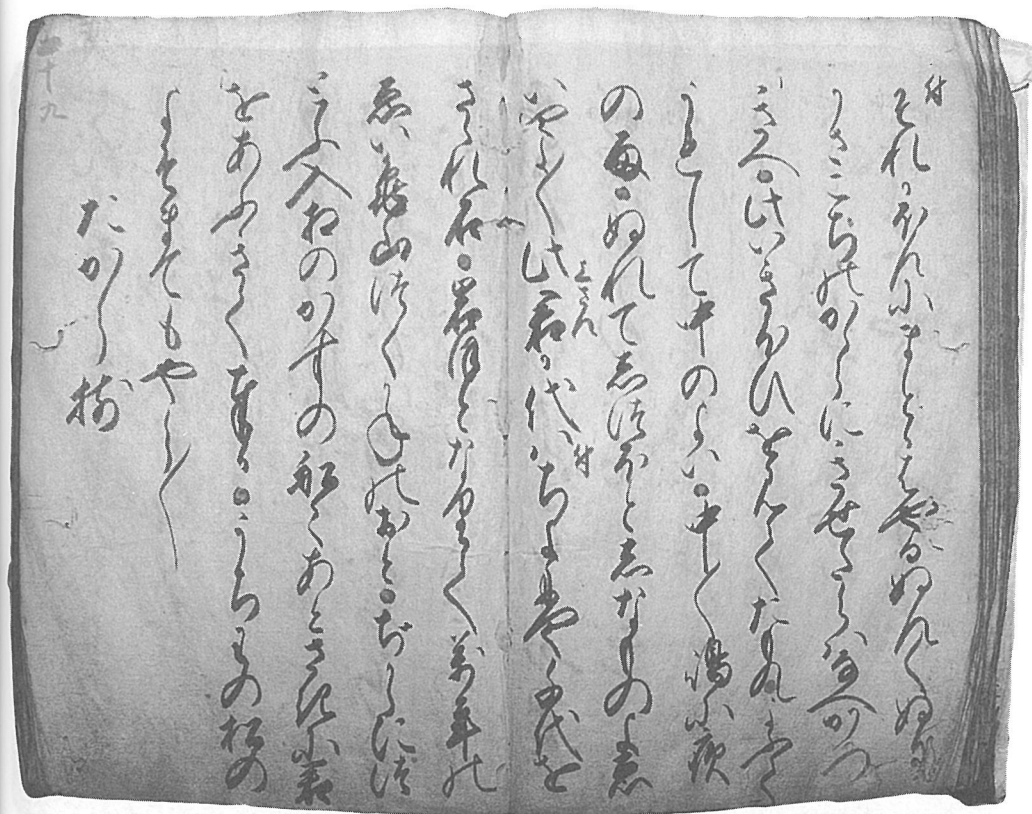
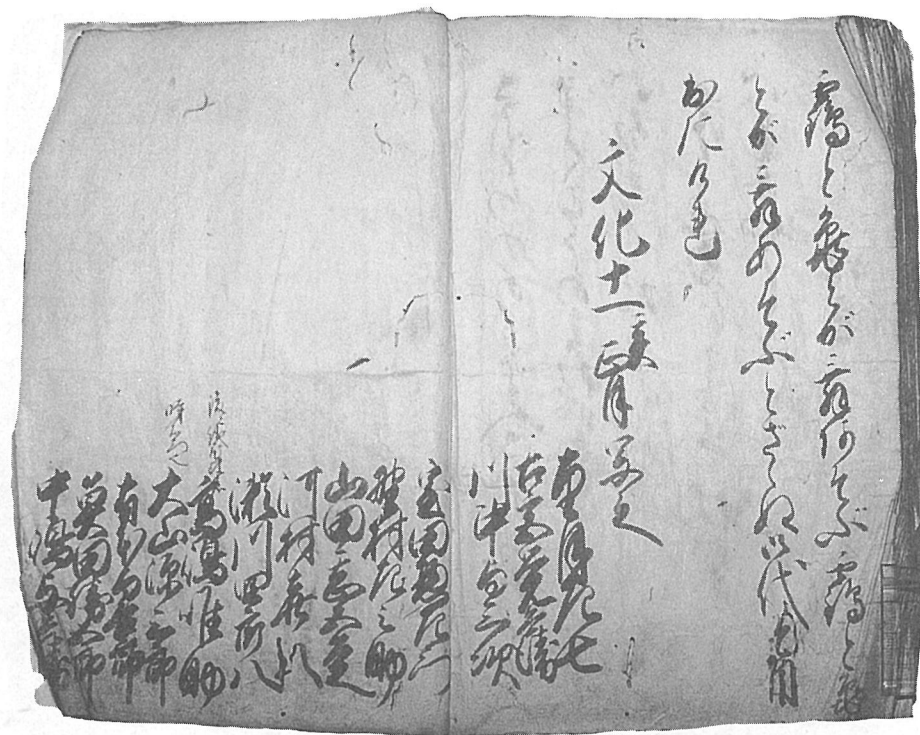


(写真1)

表紙

八景
 47丁ウ・48丁オ
 (写真4)

八景
 46丁ウ・47丁オ
 (写真3)



姫路藩御船歌本収載曲目一覧表

C 音頭（二八〇二）	姫路藩御船手御歌本□全 （一八一四）	頭E （一八三二） 新江戸御船音	A 無題四五歌本（一 八四八）	D 無題三〇歌本（一 八四八）	G 御船唄本 （二八五五）
1 皇帝	1 かう帝	1 皇帝	1 皇帝		
2 白雪	2 しら雪	2 白雪	2 白雪		
3 竜田川	3 たつた川	3 竜田川	3 竜田川		
4 宇治川	4 宇治川	4 宇治川	4 宇治川		
5 いなり	5 いなり	5 稲荷	5 稲荷		
6 古筆	6 古筆	6 古筆	6 古筆		
7 七夕	7 たなはた	7 七夕	7 七夕		
8 池田	8 池田	8 池田	8 池田		
9 月見	9 月見	9 月見	9 月見		
10 かた	10 かた	10 賀田	10 賀田		
11 御浜出	11 御浜出	11 御浜出	11 御浜出		
12 新古筆	12 新古筆	12 新古筆	12 新古筆		
13 都わたり	13 都渡	13 都渡	13 都渡		
14 泰平	14 太平	14 太平	14 太平		
15 御城廻り	15 御城廻り	15 御城廻り	15 御城廻り		
16 牡丹	16 牡丹	16 牡丹	16 牡丹		
17 新牡丹	17 新牡丹	17 新牡丹	17 新牡丹		
18 鹿間八景	18 八景	18 八景	18 八景		
19 宝そろへ	19 たから揃	19 宝そろへ	19 宝そろへ		
20 椿つくし	20 椿つくし （目録にのみ椿つくし）	20 椿つくし	20 椿つくし		
21 喜久（菊）	21 菊	21 喜久	21 喜久		
22 遊女そろへ	22 遊女そろえ	22 遊女そろへ	22 遊女そろへ		

（「姫路藩御船手御歌本□全」は実見、網掛け部分は下里静氏の翻刻による。そのほかは同氏の記録した各本の目次に拠った。）

23 島廻り	23 嶋廻り	27 島廻り		
24 櫻そろへ	24 櫻揃	23 櫻そろへ		
25 松そろへ	25 松そろへ	24 松そろへ		
26 伏見下り	26 伏見下り	35 伏見下り		
27 時ぞと	27 時ぞと	8 時ぞと		
28 御船御し	28 御船落し	18 御船おろし		
29 道中	29 道中一	30 道中		
30 同二	30 同二	31 同二		
31 同三	31 同三	32 同三		
32 船さいもん	32 船さい文	36 船齊文		
33 住吉詣二十一替り	33 住吉詣二十一かわり	41 住吉詣二十一替り		
34 七つ替り	34 七つかわり	42 七つ替り		
35 魚ぞろへ	35 魚ぞろへ	25 魚ぞろへ		
36 はつ春	36 初春	17 初春		
37 花よせ	37 花よせ	22 花よせ		
38 明徳	38 明徳	19 明徳		
39 春立	39 春立	40 春立つ		
40 時成	40 時なり 42 時なり	20 時なり		
41 徳若	41 徳若	21 徳若		
42 鹿島	42 かしま	34 鹿島		
43 菊水	43 菊すい	39 菊水		
是より歌枕文句書				
44 神崎節			1 神崎節	
45 山から節			2 山から節	
46 沢辺節			3 沢辺節	

[illegible]

※曲目上の数字は、各本収載の順番を示す。成立の一番古いと思われるC本の曲目が、各本にどのように収載されているかを見るために作成したので、C本にないものは左端の行に掲載されている。

※曲目の下に★印がついている曲は、所収本の目次には載っていない曲である。

[illegible]